



優秀賞 [高校生の部]

## 日本で本当にグローバルな 人材を育てるには

The Hills Grammar School 2年

江橋 朱里 えはし あかり

留学生活での観察や体験に基づき、グローバル人材の育成のためには日本独自の美德「思いやりの心」を守りながら自己主張力を鍛える場を創っていく必要があるという提案には、オリジナリティと説得力がありました。育成策の具体性も評価を得ました。

近年、日本を取り巻く環境は大きく変わってきている。国際化が進み、日本人が海外に進出する機会が増えている。2030年には、2020年の東京オリンピックを経て、国際交流がより盛んになっていることだろう。現在、日本は国を挙げてグローバル人材養成のために日本人の英語力強化に力を入れている。しかし、私は英語力強化ばかりに力を入れるだけでは世界に通用するグローバルな人材は育たないと考える。2030年代、私はオーストラリアでの生活を活かした教育者になりたい。私はグローバルな人材を育てるために、「思いやりの心を守ること」「学ば場での思いやりの心を壊すこと」「自己主張力を鍛える教育を子供たちに与える環境創り」が必要であると考え。

日本が守っていかなければいけないのは、思いやりの心である。なぜなら私は、思いやりの心とは他文化には存在しない日本独自の美德であると考えからだ。私は2年前から多民族国家と呼ばれるオーストラリアで生活をしている。大多数のオーストラリア人は、この200年の間に全世界からやって来た移民かその子孫である。私の通う現地の高校にも、ヨーロッパやアジアの様々な国の出身者がいる。私は今まで日本人として日本で生活していたため、日本という国を客観的に見る事がなかった。しかし、オーストラリアで生活を始めて日本を客観的に見るようになり、気が付いたことがある。それは、これからの社会において、日本の美德である思いやりの心は残すべきであるということだ。思いやりの心は相手の立場を押し量り、相手に余計な気遣いをさせず、また主張しないという意味である。この思いやりの心は、他文化には存在しない日本独自の美德である。これに気付かせてくれたのは、アメリカ人の母と日本人の父を持つハーフの友人である。彼女は災害後にとった日本人とアメリカ人の行動が同じ人間とは思えないと言った。2011年3月11日の東日本大震災後、多くの人々は家族や家を失うなど死と隣り合わせの生活に怯えていた。しかし、日本人はどんなに厳しい環境

に置かれても限られた食糧を分け合い、命を繋いだ。自分だけでなく皆が辛い思いをしているのだという思いやりの心が、日本人一人一人に意識せずとも存在していたからである。

一方、アメリカで大規模なハリケーンが起こった際、店の商品は略奪され、人種差別さえも起こった。似た状況下で全く違う行動が見られたのである。これは、日本人は幼い頃から身に付けた相手の立ち場を押し量る思いやりの心を持っているのに対し、アメリカは人種のるつぼと呼ばれ、多文化の人が共存しているため、個人を主張するという社会性が存在していることが原因である。

このように、思いやりの心こそ日本ならではの美德である。東日本大震災は多くの人々の命を奪った。しかし、日本の美德である思いやりの心までも奪うことはできなかったのである。したがって、私は2030年もその先の未来までも、思いやりの心を残していくべきであると考え。

思いやりの心は守っていくべきであるが、私はグローバルな人材を育てるためには学びの場で思いやりの心は捨てるべきであると考え。なぜなら私は、グローバルな人材を育てるには英語力強化よりも自己主張力を身に付けさせる方が重要であると考えからだ。平成25年4月8日、自由民主党はグローバルな人材育成を目指した英語教育の抜本的改革について英語力の強化を含んだ文書を提出した。施策としては、英語教師について一定の英語力の義務化や、小中高等学校の生徒の英語に触れる時間の増加などである。

オーストラリアでの生活を始めて数カ月間、私は英語力不足のために友達ができず孤独であった。しかしながら、英語が少しずつ上達しても、現地の人々の会話についていけないのである。私が、現地の人に「日本は無差別に真珠湾を攻撃した」と言われた時、日本軍がそれに至った経緯を主張することができなかった。私はその社会的背景を英語で説明する能力はあった

が、主張をする勇気がなかったのである。なぜなら、私の日本人としての考えがオーストラリア人の気分を害してしまうと考えたからである。それは、日本独特の思いやりの心の表れであった。英語の能力はあっても、相手を配慮し過ぎて自己主張力のある外国人に対応できないのである。私は多民族の中で生活をして、彼らの自己主張の強さに驚いた。それと同時に、思いやりの心を大切に過ぎる日本人の社会性に不安を覚えた。私が考えるグローバルな人材とは、言語に長けているだけでなく、自分というものに重点を置きながら他文化を理解し、多文化を尊重できる力を持っている者だ。したがって、いくら自由民主党が国を挙げて英語力強化を推進しても、相手を気にし過ぎる社会性が身に付いた日本人が、他文化を理解し多文化を尊重できるようグローバルな人材に育つことはないのである。

したがって、思いやりの心を守りながら、学びの場では思いやりの心を捨て、自己主張力を鍛える場を創っていかねばならないのである。現代の日本の授業形態の多くは、教師が指導権を握り、教師の板書を軸とし生徒が発言をするときは手を挙げなければならない。一方でオーストラリアの授業形態は、教師よりも生徒が中心となって展開している。板書を単純にノートに写すよりもディスカッションによる生徒の発言に重点を置いている。他人が自分の考えに異議を唱えようと、構わずまたそれに異議を唱える。討論は相手を納得させることができるまで続けられる。

今までに両国の異なる授業形態を経験した私が、2030年代に望ましいと思う授業形態は、学年ごとに3段階に分かれた自己主張能力を身に付けるということである。小学校2年生までは、日本人として日本の美德である文化は身に付けておくべきであるため、この授業形態は小学校3年生から始まる。まず、小学校3年生から6年生までは、集団の中で自分の意見を主張できる能力を身に付ける訓練をする。そのため、授業中に集団に分かれて意見交換をする時間も設ける。教師が授業の初めにその日話す話題について生徒に投げかけ、生徒が集団になってそれについて様々な視点から意見を出し合う。そして、集団で考えたことを皆の前で発表する。次に、中学校時代は自己主張能力を確実なものとするために、定期試験の他にその単元で習ったことについてのプレゼンテーションを実施する。プレゼンテーションの課題は教師によって出題され、生徒はそれに対し自ら調べ、自分の答えを発表する。自分の意見を皆に理解してもらうことは、自分の意見を主張する上で重要なことだ。高校生時代には、グローバルな人材を育てるために重要なグループディスカッションを実施する。対立する意見を理解しながら自己主張を行う必要がある。しかし、前の2段階を踏んでいるため、自分の意見を主張するための力は十分備わっているはずである。

15年後の2030年、日本はより国際化が進んでいるに違いない。私の頭の中には、自分に重点を置き、他文化と多文化を尊重しながら世界中で多くの日本人が活躍する未来社会図がすでに完成している。これを現実にするために、思いやりの心を守りながらも、学ぶ場での思いやりの心を壊し、そして、自己主張力を鍛える教育を子供たちに与えることができる環境を創るべきである。

#### 参考文献

- ・ 鈴木孝夫『ことばと文化』岩波新書、1973年
- ・ 金田一春彦『ホンモノの日本語を話していますか?』角川oneテーマ21 角川書店、2001年
- ・ 自由民主党教育再生実行本部「成長戦略に資するグローバル人材育成部会提言」平成25年4月8日  
[https://www.jimin.jp/policy/policy\\_topics/pdf/pdf112\\_1.pdf](https://www.jimin.jp/policy/policy_topics/pdf/pdf112_1.pdf)

#### [受賞者インタビュー]

### 教師として 日本の未来に貢献したい



#### ——コンテストに応募した理由、きっかけは?

私はオーストラリアで生活を始めてから、「海外に進出するには英語力を身に付ければ良い」と考えている日本人に疑問を持ち始めました。でも、この思いを伝える場がありませんでした。コンテストに応募したら、日本の未来について考えるだけではなく、書くことにより私が教師として日本の未来に貢献したいという夢に実行力を持たせ、伝えることができると思いました。

#### ——この論文を書き上げるまでに、どのくらいの時間がかかりましたか?

書き始めてから書き終わるまでは1週間ほどでしたが、自分が書きたいことを頭の中で整理するには時間がかかりました。

#### ——この論文を書く上で苦勞したことはありますか?

書きたいことを頭の中では整理できても、3,000字にまとめることがとても大変でした。

#### ——今、どんなことに興味を持っていますか?

日本の教育、日本のセンター試験廃止についてです。